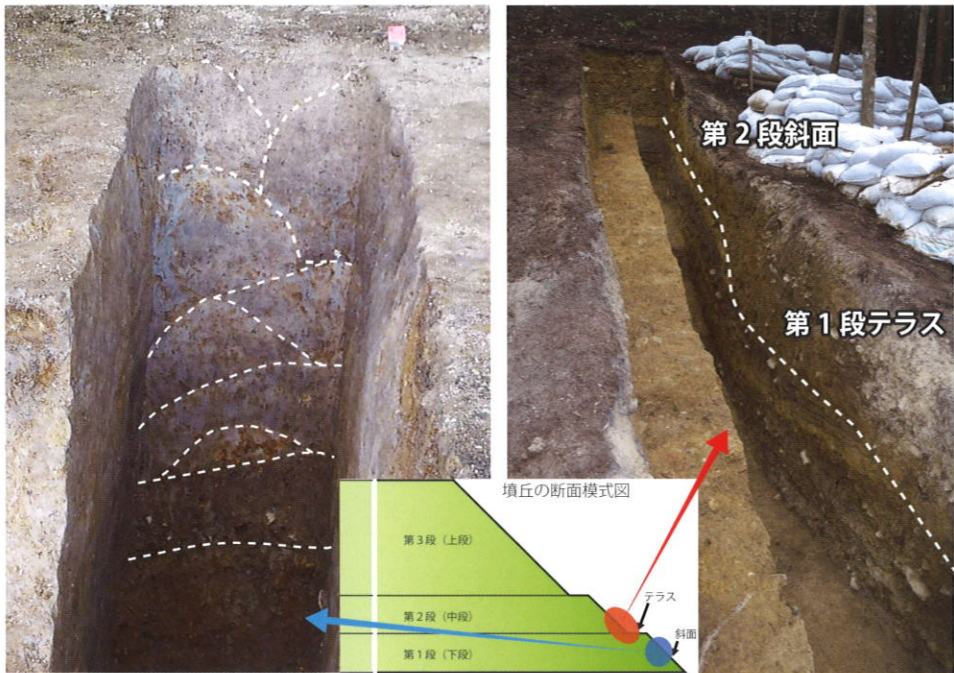


こらなく ちくせい  
**墳丘の構築方法** - 3段築成の前方後円墳 -

両宮山古墳は弥生時代の集落が営まれた丘陵を利用し、その上に盛土を施し造られています。前方部第1段目では、土塊積みを行っているところが見られ、テラス付近では平坦面を形成するように積まれています。さらに、第2段斜面の表面はその斜面に沿うように斜めに盛土を行っています。両宮山古墳のような大古墳の墳丘の構築方法が判明した事例は大変貴重です。



▲ 前方部第1段目の盛土 (白破線：土塊の単位)

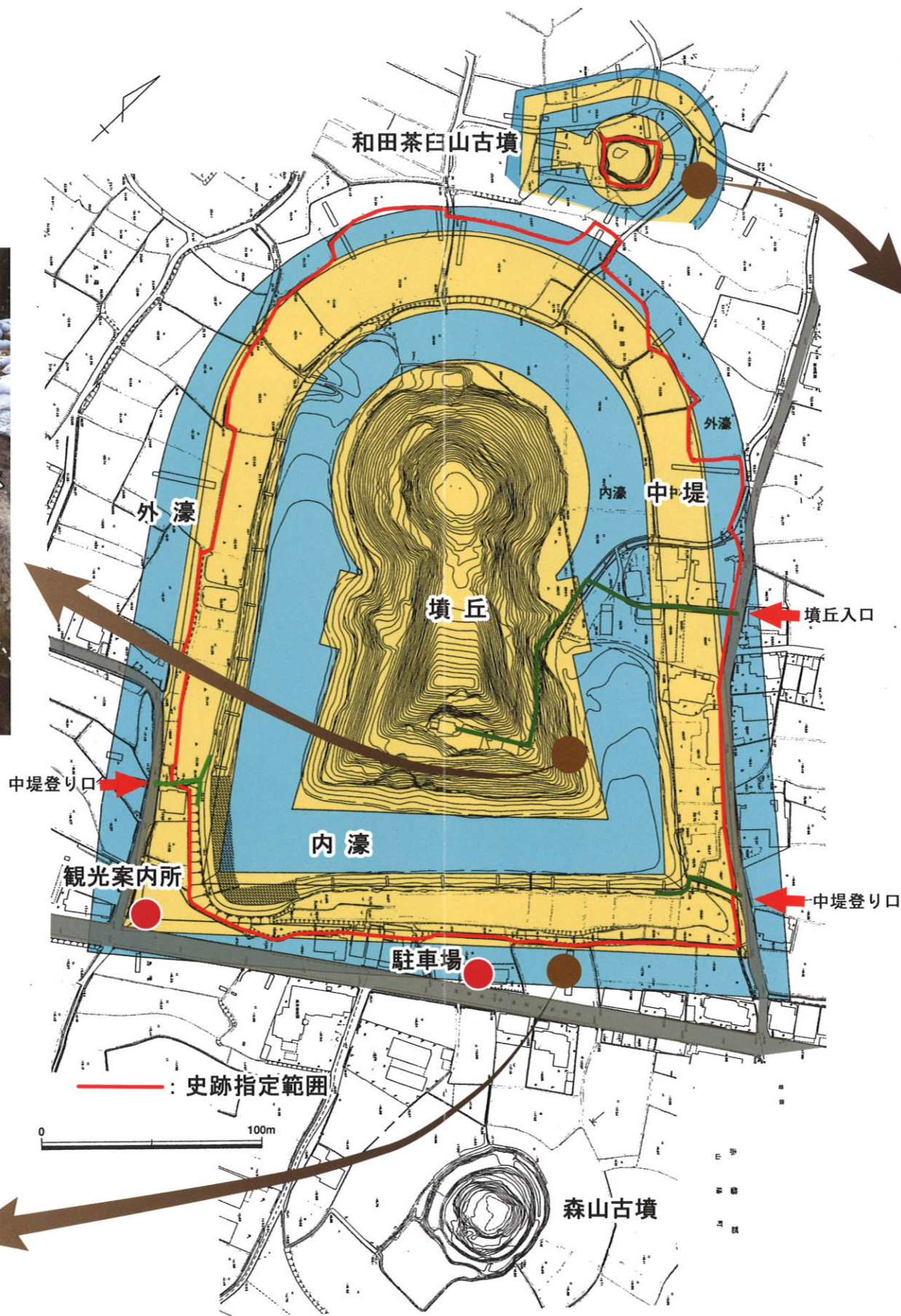
▲ 前方部第1段テラスから第2段斜面の盛土状況 (南東から) (白破線：残存盛土上面)

**外濠** - 二重目の周濠 -

発掘調査によって、現在田畑の広がる中堤より外に外濠が発見されました。外濠は古墳を完周し、後円部側では幅約13m、前方部側で幅約20mをはかります。二重の周濠は畿内の大王墓を中心にみられ、広大な墓域を形成する役割も果たしています。岡山県内の古墳では4基しか見つかっていません。



▲ 前方部前面の外濠と中堤 (南から)



**古墳の総長 349m**

二重の周濠をもつ両宮山古墳は、墳丘を囲む内濠・中堤・外濠までを含めると、その総長は主軸線上で349mとなります。これらの外周施設や陪塚を備えた両宮山古墳は畿内の大王墓に次ぐ格付けをもって築かれた古墳であると考えられます。

そして、その被葬者は畿内の王権を支えた有力豪族であったと想像できます。

ばいつか  
**陪塚** - 和田茶臼山古墳 -

両宮山古墳後円部の北側に位置する帆立貝形古墳です。墳丘全長55mをはかります。この古墳も、両宮山古墳と同様に二重の周濠をめぐることで発掘調査により判明しています。主墳である両宮山古墳と極めて計画的に配置された古墳で主墳に葬られた人物と親密な関係が想定されます。



▲ 和田茶臼山古墳の後円部と外濠の調査 (東から)

ふきいし はにわ  
**葺石・埴輪の未設置**

両宮山古墳と和田茶臼山古墳では葺石と埴輪が見つかっておらず、墳丘にはそれらが設置されていなかったと考えられます。埴輪に関しては、周辺の森山・正免東・朱千駄・小山・廻り山古墳には認められます。外濠、陪塚まで備えた大古墳に葺石と埴輪がないのは大変不思議です。

南西の造り出しからも古墳に伴う遺物の出土はなく、古墳の祭祀が完結しなかったのでしょうか。埋葬施設については調査されていません。



▲ 両宮山古墳の全景 (南東から)